

『彼方』における流体説

——マリア派異端とユイスマンス (その4)¹——

大 野 英 士

0.

19世紀の神秘家＝オカルティストである、ブーラン Joseph-Antoine Boullan (1824-1893) と作家 ユイスマンス J.-K. Huysmans (1848-1907) の関係については、すでに多くのことが語られている。しかし、一つ確認しておかなければならないことがある。一般にユイスマンスの専門家と言われる人たちが、特にカトリック的な立場にある人たちは、ローマ教会とオカルティズムそれぞれの周縁に生きたブーランというこの特異な人物に早くから極めて強い関心を寄せてきた。ここでは先学に敬意を示す意味で、ピエール・ランベール、ピエール・コニー、モーリス・M・ベルヴァル、リチャード・グリフィス、ロベール・バルディックといった学者の名前をあげておこう。² しかし、何故か彼らはブーランのユイスマンスに対する影響を過小評価する傾向にある。彼らは、仮にユイスマンスがブーランに一時的に影響を受けたにせよ、神の恩寵によって、ユイスマンスは正統信仰を回復したと主張するのだ。

しかし、ユイスマンスとこの奇妙な異端セクトの教祖との関わりは、何らかの挿話にとどまるような性格のものではない。ブーランのセクトはユイスマンスの小説に何人かの作中人物のモデルを提供した。また、ユイスマンスは小説のプロットの中に「功德の転換」や「神秘的身代わり」といったブーランの教理を取り入れた。しかし、それだけではなく、ブーランとの接触は、ユイスマンスのオブセッションの総体に、根源的で、システムティックな変化を引き起こしていくのだ。

第一に、ブーランは、欲動のレベルで作家の欲望の配置にダイナミックな変化をもたらすある種の「物質」を提供した。また、第二にブーランはユイスマンスの欲望のシステムの再構成される際の構造上の軸の形成に関して示唆を与えた。こう言うだけでは、何のことを言いたいのかわからないだろう。それぞれについて、内容を具体的に検討する必要がある。本稿では、主として『彼方』に記述された欲動に作用するダイナミックな「物質」に関して、ユイスマンスがブーランから受け継いだ発想の展開を見ていきたい。

I.

ブーランの教説は、「修復」「悪魔祓い」「魔術」「生命の交わり」等々、極めて雑駁な内容からなる広大な領域にまたがっている。ただこの教説は見かけは多彩ではあるけれど、それらの内容を統一する原理というか、中心となるインスピレーションの核がないわけではない。

ブーランのオカルト神秘主義のシステムの中では、罪や、呪い、病気、瀆聖、さらには恩寵までを含むすべての要素が一つの「量」として計量可能であり、また、これらすべてを操作したり、空間を移動させることができ、お互いに置換・変換することが可能であるということだった。罪も、呪いも、

病気も瀆聖も、恩寵も、一つ一つ個別に切り離し、ある対象から別の対象へ、ある個人から別の個人へと移し替えることができるのである。

すでにみたように³キリスト教の修復や贖罪には、借金や欲望の論理と重なる形で、罪や恩寵を「量」として捉える論理が働いていた。従って、このこと自体は必ずしも「異常」な現象とはいえないかもしれない。

しかし、ブーランは彼の思考のあらゆる水準で、罪や、呪い等々を文字通り「物質」的なものと考ええる方向に傾いていた。彼のシステムにおいては、それが罪と呼ばれようと、病と呼ばれようと、はたまた呪いと呼ばれようと、計算することのできる「量」であり、それゆえ、空間の中を自由に移動できる物質的な「基体」が想定されている。ブーランの用語によれば、それは「流体」fluide と呼ばれるものである。

例えば、オズヴァルド・ヴィルト Oswald Wirth (1860-1943) にあてた手紙の中で、「生命の交わり」に関する質問に答える形で、ブーランは人類の贖罪は性行為によって完遂されるが、それを仲介するのは「流体」だと述べている。

生命の酵素こそが、三つの支配に生きる存在を統べる生命の原理と結びついて、生命の階梯を上に向かって一段一段のぼらせるのです。これこそが、あなたのおっしゃるとおり、秘儀のなかの秘儀というべきものです。

しかしながら、こうした産出の権利を行使するとき、誰も一人でおこなうことはできないのです。一人の人間はただ、流体をもっているにすぎません。生命の酵素が作用するためには、二つの流体が結びつかなくてはならないのです。⁴

オズヴァルド・ヴィルトやスタニスラス・ド・ガイタ Stanislas de Guaita (1861-1897) など、ブーランとは反対陣営にいた者だけではなく、ピエール・ランベール、ピエール・コニー、リチャード・グリフィスなど後の研究者も、ブーランの信者達は、失墜以前の霊的身体を取り戻すために、現実性行為をおこなったと考えている。ところで、スタニスラス・ド・ガイタによれば、「生命の交わり」の原理は、最も初等の算術的公式であらわすことができるのだという。「何者も、自分が持っているものしか与えることはできない。したがって、与えようと望む前に、獲得しなければならない。他人が「清浄な」本性を取り戻すことができるように助けようとする以前に、自分自身を「清浄に」しなければならない」のだ。

従って、「流体的な」論理に翻訳すると、さまざまな存在を贖罪によって上昇させるには、まず自分自身の流体を精霊の力を借りて純化——清浄化——した上で、清浄になった流体を他者に配分してやればよいということになる。

実際、ユイスマンス自身は、「生命の交わり」とは、「性行為」を通じて行われるのではなく、流体を媒介にして行われる儀式に過ぎないと信じていた節がある。しかも、ブーラン死後、その数々の常軌を逸した行動を知った後でも、この確信が揺らいだ形跡はない。

1900年2月、若い友人で作家のエスキロール J. Esquirol (本名アドルフ・ベルテ Adolphe Berthet) に宛てた手紙の中でユイスマンスは書いている。

ブーランについての情報はあまり正確とはいえません。実際にははるかに複雑ですし、私の知る限りは、

彼のところで売春宿のような痴態が繰り広げられていた事実はありません。ブーラン一派の交接はなによりも「流体」を使ってなされるものでした。¹男精夢魔や²女精夢魔のたぐいです。ブーランの死後私が見つけた書類からは、およそあり得ない性行為の記述が出てきました。たとえば何某夫人とハバクク⁵の交接とか、やはり多少なりと聖書に関係しているずっと以前に亡くなった別の人物との交接などといった具合です。夜の暗示のための手段や、器具などというものすらありました。(かつてメルキュール・ド・フランスがこれに関する記事を書いています) ブーランはこうした方法を使ったのでしょうか？ 個人的にはそうは思いません。⁶

II.

しかし、流体の介在は、「生命の交わり」だけに限ったことではない。ブーランのシステムにおいては、罪と病と呪いとは相通じているのである。ブーランによれば罪と病気とは、いずれも悪魔の「呪い」の介在で引き起こされるという意味で、悪魔のつくりだすものである。罪は、病気と同じ本質を持っているので、人から人へ移動することができるものだ。そして、呪いはもともと「流体」の性質をもっている。ブーランは薔薇十字団のオカルティストから呪いの攻撃を受けたと主張したが、この場合の呪いがその典型だ。

別の場所⁷で書いた通り、ユイスマンスがブーランと知り合った頃、ブーランはスタニスラス・ド・ガイタやオズヴァルド・ヴィルトとオカルト戦争の真っ最中だった。ブーランや、ユイスマンスを含む彼の信者集団に共有されていた妄想によれば、カバラの薔薇十字団のメンバーは、ブーランの教団に流体による一種の衝撃波の形で呪いを送りつけたのだという。この戦いの模様は、ユイスマンスと共にブーランの弟子だったジャーナリストのジュール・ボア Jules Bois (1868-1943) が残した記事のなかに活写されている。

「呪いを行う者たち」は、ブーラン師に復讐を行い、かたときも平穏に生活することを許さなかった。師は、私に脚を見せてくれたが、悪魔的な一撃によって骨まで貫かれていた。流体の弾丸はさらに師の隠者のように痩せさらばえた胸にまで穴をあけていた。

たまたまりヨンに滞在していた画家のローゼは戦いが行われた晩、見えない拳骨がミサを執り行う師の額めがけて、うなりをあげて襲いかかる様を確認した。師の額は、瘤で腫れ上がった。応戦するには時すでにおそく、師は不意をつかれてしまったのだ。

J.-K. ユイスマンス同様、私はこの虚空で行われるワートルローの戦いに強い衝撃をうけ、今ははっきりと覚えている。⁸

この流体という物質は、悪魔や死者の降霊の材料としても使われる。ユイスマンスとの間で交わされた書簡のなかで、ブーランは述べている。男精夢魔や女精夢魔は、ある時には、呼び出された死者に流体でこしらえた身体をまとわせ、それを被害者のもとに送りつける。また、別の時には、自分自身が「汚物」から立ち上る「流体」を使って人間の姿となる。彼らは、こうして「流体からつくられた人間の姿」で、死者の霊や生身の人間と交わるのである。

呪いや降霊が流体を用いて行われるなら、「修復」や「悪魔祓い(除霊)」も同じ方法を用いて実行される。

ブーランの考えでは、罪や、病気や、呪いは通底しているのであるが、それは、罪や病気は呪いと

同じ性格を共有しているためである。別の言葉でいえば、罪や病気も「流体的」とであると考えることができる。

だから、ブーランの「流体的」な経済の用語を用いて表現すれば、修復—功德の転換—とは、自分自身の体に、一定の量の他者の悪しき流体を移し換え、引き受けるということなのだ。悪魔祓いも同断である。やはり魔力をもった流体を自分の身体に引き受け、神の恩寵を助けとしてこれを浄化し、最後に、良性的になった流体を他者に移し換えてやればいいのだ。もう一つの方法は、護符（悪魔祓いのベネディクトゥスのメダルなど）や特殊なミサ（「メルキゼデクの栄光のミサ」）を使って、より直接的に呪いを相手に叩き返すというものだ。

ブーランの教説の影響は、「神秘的身代わり」の教義を中心に『彼方』*Là-Bas* (1891) 以降、『出発』*En Route* (1895) から『スヒーダムの聖女リドヴィナ（腐乱の華）』*Sainte Lidwine de Schidam* (1901) に至るユイスマンスの後期作品群のそこここに確認できる。ユイスマンスとオカルティストとの関係は、しかし、単なる一方的な影響関係ではありえない。そもそもユイスマンスの想像世界には、「流体」をめぐる、ブーランのオカルト神秘主義と親近性が認められるのである。事実、ユイスマンスはブーランと出会う以前から、というより創作活動の初期の段階から、「泥」や「穢れ」、「金」、「食物」、「女性」などをめぐる流体的なイメージに執着し、それらを彼の主人公達が理想の隠れ家として構想する「閉鎖された空間」から排除することを、彼の文学のある意味で唯一のテーマとしてきたからだ。

III.

最も普通の、そして同時に科学的な意味に解せば、「流体」というのは、「水や空気のように、ごく小さな力の影響で形を変えるあらゆる物質で、剛性を欠き、同じことだが、固有の形態を持たないもの」のことである。⁹ したがって、液体は「凝縮された流体であり」、ガスは「希釈された流体」ということになる。

一般に、ユイスマンスの小説世界に棲まう作中人物は、いずれも、生暖かく「閉鎖された」空間のなかにのみ安らぎを見いだす傾向がある。¹⁰

ところが、ユイスマンスの妄想的な宇宙のなかで「否定的な」価値を帯びているもの、ユイスマンスの作中人物が身を潜める特権的な空間を攪乱させ、彼らがこの空間で生きていくことを不可能にし、彼らを排除しようとするものは、いずれも「流体的」な性格を帯びている。またこの「流体」という性格は、女性や食物に関わる「穢れ」と密接な関わりをもち、テキストの深層において作家のアルカイックな欲望とつながっている。

例えば『マルト』*Marthe* (1876) の主人公は「泥」という様態をとった穢れに貫かれ、脅かされる。娼婦マルトは、女性をめぐる汚れと恐怖の中心である娼家を出て、パリの街をさまよい歩くが、この散策は、この自然主義の小品のなかで、あらゆる「泥」のテーマが流れ込み、交錯する通路の役割を果たしている。¹¹

マルトが閉じこめられている娼館は「踏み越えることのできない監獄」であり、そこに閉じこめられた不幸な女達が「これまで詩人が想像したあらゆる地獄、あらゆる徒刑場、あらゆる牢獄船より恐ろしい生活」¹² を送ることを強いられる場所だ。またそこは、風俗取締官の厳しい監視の目にさらされ、権力の罟が張り巡らされている場所でもある。娼館に起源をもつ泥の汚れはこの意味で、強力で

ダイナミックな権威に従属している。一度身体にしみこんだら、二度と痕を消すことができず、逆にその恐怖と執拗さに魅惑されて、光にひかれて身を滅ぼす虫のように、おもわずそちらに引き込まれかねない負の光源なのである。

恐ろしい穢れを自分の身体に引き受ける下層階級に属する「虐げられた女たち」は、通常ユイスマンスが女性に対して抱く嫌悪感を、一次的にせよ免れているという意味で例外的な存在である。

同じ貧しく虐げられた女たちの系譜に属する例としては、『ジレンマ』*Un dilemme* (1884) のソフィーや、とりわけ『ビエール川』*La Bièvre* (1890, 1898) があげられるだろう。ビエール川とは、その名の通り生身の女ではない。かつてパリ南方の郊外に水源を発し、ゴブラン織りの工場などが建ち並ぶパリの下町を抜けてセーヌに注いでいた小さな川である。都市化が進んだ現在では、パリ市内に入ってから部分は蓋がかけられて暗渠になっている。ユイスマンスは幾つかのエッセイの中でこの川を繰り返しとりあげているが、ユイスマンスにとってビエール川は「今日、大都市において搾取され、悲惨な境遇に墮とされる女性の最も完璧な象徴」¹³ である。

川—迫害される女—娼婦—泥という系譜はユイスマンスの想像力の中にしっかり錨を降ろしている。例えば『ビエール川』の末尾の次のような一節を見れば明らかだろう。

都市の畏の中におびき寄せられる女性たちの悲惨な境遇を象徴するビエール川は、また、修道女や、古い家柄を誇る女たち、貴顕の階層に属する女たちが、しだいに身を落とし、転落に転落を重ねたあげく、ついには、娼館に閉じこめられて、稼ぎのよい商売の恥ずべき泥となりはてる、そうした運命の見事な表象となっていないだろうか。¹⁴

泥との近縁性、そしてそれを運ぶ水との近縁性から、迫害される女たちは文明によって「異物」として排除され、抑圧される自然というもう一つの神話との関わりをも暗示する。

『ビエール川』の別のヴァージョンで、ユイスマンスは述べている。「自然が興味をそそるのは、虚弱で悲嘆にくれているときだけだ」。¹⁵

女性たちは、パリの地下に張り巡らされた下水網をたどって上ってくる泥の穢れにより浸潤され、脅かされているだけでなく、しばしば泥と同一視される。マルトは自分自身が消すことの出来ない穢れだと述べている。

「あなたは、泥を拾ったんだわ。いい？ どんなんにこすっても絶対に消えないし、布についた油染みみたいにまた浮き上がってくるんだわ」。¹⁶

さらに、泥＝穢れは、ユイスマンスの作品に登場する犠牲となる女性たちが自らの身体にそれを引き受ける時、解放や贖罪のテーマとも結びつく。

風俗取締警察の恐怖に怯える生活に疲れ、娼館にもどって、泥のなかに底の底までどっぷりと浸かる覚悟を決めたマルトに対して、落ちぶれた役者で酔っぱらいの浮浪者、つまりは娼婦の永遠の連れ合いであるジャンジネは厳かに告げる。「泥水のなかに首をつっこみ」「汚辱の最後の階段を降りること、私は、これを罪の贖いと呼び、誠実への回帰と呼ぼう」¹⁷ と。

こうした泥＝穢れと、贖罪＝昇華の弁証法的な関係は、『彼方』のテキスト、ちょうどグリュネヴァルトの磔刑図の描写の後にも書き込まれている。主人公デュルタル自身の救いが問題となっている部分である。

自分を捨てて心から神に従う喜びを味わうためには、魂が単純で、あらゆる汚れから解放されていなければならない。虚飾のない生まれたままの姿でなければならない。しかし、デュルタルの魂は泥にまみれ、古い海鳥の糞からにじみ出た凝縮した粘液にどっぷりとつかっていた。¹⁸

そしてここで奇妙な比喻が持ち出される。修道院に引きこもりたいというデュルタルの希望が、みずから進んで娼館に戻ろうとする娼婦と比較されるのである。まるで、キリスト教の信仰の中心となる修道院が、穢れと汚辱の中心である娼館と比較可能な何らかの共通点をもっているかのよう。

このテキストが暗黙のうちに今し方述べた『マルト』の筋書きをなぞるものであることは明らかだ。

彼はちょうど風俗警察の私娼狩りに捕まる危険を避けたり、食費や部屋代や、下着の掛かりにあれこれ思い煩うのを避けるために、娼家に入る娼婦たちのように、なんとなく修道院に逃げ込むことを考えていた。

ユイスマンスのファンタスムの中では、流体的なイメージはしばしば否定的な価値、その特権的な空間に侵入してくる穢れや恐怖——特に何らかの意味で女性と密接に関わる穢れや恐怖——と結びつけられてきた。

また、女性たちが発散する穢れや恐怖は、ある場合には隠喩的に、ある場合には猥褻なばかりに直接的に、彼女たちが給仕する食物を「流体」として汚染する。

さらに、単に個人のレベルにとどまらず、金銭＝資本とか、アメリカ主義とか、ブルジョワ社会の凡庸さなども、ユイスマンスのファンタスムの中では流体的なイメージをとり、しばしば食物-女性に関わる穢れや恐怖と関わりを持つ。

なかでも「重大な罪の最も滋養ある食物」¹⁹ とされる金銭は、有害で穢れをばらまく食物という性格を保ちながら、その流動性、偏在性、繁殖力、自己増殖力によって、まがまがしくも悪魔的な「資本」へと変貌する。

しかし、金銭が本当に恐るべきものとなるのは、そのまばゆい名前を言葉の黒いヴェールにかくし、資本と名づけられる時だ。そうすると、個人をそそのかして、盗みや殺人を犯すようにしむけるのにとどまらず、その活動は人類に広がり、銀行を建てたり、物を買占めたり、人の命を自由にし、そうしようと思えば、何千という人間を飢え死にさせたりするのである。

この間、金は滋養を補給し、肥え太り、金庫の中で、ひとりでに利子を生んで増殖していくのだ。そして、新旧二つの世界は跪いて資本を敬い、まるで神のように、死ぬほど金を追い求める。

なるほど、かくも人びとの魂を支配する金というものは悪魔的なものであり、さもなくば、説明不能なものなのだ。²⁰

IV.

いつと明確に決定することは出来ないが『彼方』の執筆の後半になって、ブーランのオカルト神秘主義的システムは、ユイスマンスの想像力の中に微妙な影響を与え出す。

別に、ユイスマンスが最初からブーランの思想に完全に取り込まれたと言うわけではない。『彼方』のテキストはデュルタルをはじめ、医師デ・ゼルミー、サン・シュルピス教会の鐘衝きカレー、占星術師ジェヴァンジェーなどといった人びとの悪魔学をめぐる対話によって進行する。この対話の手法

によって、作品自体が一つの言説やイデオロギーに全面的に同意することを避けながら、複数の異なった水準に属する言説同士を関係づけ、ユイスマンス自身の想像的宇宙に一つの統一を与えることが可能になっているともいえよう。

しかしながら、テキストの多くの箇所ではブルーラン由来の「流体」的な発想の痕跡ははっきりと見て取れる。

例えば、『彼方』14章には呪詛をいかにして遠隔地まで運ぶか話が出てくる。占星術師のジェヴァンジェーが、現代の最も恐ろしい悪魔主義者、司教座聖堂参事会員ドークルに呪詛をかけられ、リヨンに住む白魔術師ジョアネ博士のもとに逃げていくという挿話である。

この箇所は、ユイスマンスがブルーランの「思想」を取り入れた典型的な例だが、それもそのはず、ユイスマンスは「ポンプ」と呼ばれる彼独特の手法で、ブルーランの手紙を下敷きに、字句もそのまま自分の小説のテキストに組み入れているのである。ブルーランは手紙の中でユイスマンスに事件や状況を細かく指示した、一種のシナリオを提示して、小説のプロットを提案することすらあった。

ブルーランが提案したプロットは「占星術師」が魔術師に呪詛を送りつけられ、ジョアネ博士がそれを「呪い返し」で救うために大活躍を演じるというもので、ブルーランは、さらに、占星術師を呪詛によって殺すのにひと役買う「毒を運ぶ女」を登場させるように、ユイスマンスにすすめている。²¹

小説生成の観点からすると、ユイスマンスがジェヴァンジェーという占星術師を造形したのはこれよりはるか以前で、直接ブルーランの提案によって生まれた訳ではないが、これ以降、ブルーランの教説や意見の多くが、この作中人物の発言を通じて紹介されていく。

ここで、デ・ゼルミーは、「ジェヴァンジェーの受け売り」だとして、悪魔主義者が使う呪詛の材料を説明しているが、そのなかには、やはり食物や女性をめぐる穢れに関わりの深い物質が、好んで選ばれている。

悪魔主義者の毒は、「“聖別”された聖餅を食べさせて育てたハツカネズミの血」だの、「小麦粉と、肉、聖餅、水銀、動物の精液、人間の血、酢酸モルヒネ、鎖蛇の脂などを混ぜ合わせたもの」だの、「聖体のパンと葡萄酒と、たくみに量を加減した毒物を食べさせた魚」²² などといった成分からできているのだ。そして、司教座聖堂参事会員ドークルが占星術師ジェヴァンジェーを脅かす最も恐ろしい毒は、「短刀を突き刺した聖体と、たくみに調合された毒薬の混ざった飲み物や料理を食べた女性の経血」²³ だという。

しかし、さらに重要なのは、悪魔主義者達がこうやって準備された毒物を、どのような手段で相手に送りつけるかだ。医師デ・ゼルミーはやはり、ジェヴァンジェーの打ち明け話を報告しながら次のように語っている。

「ねらった敵に呪詛を送り届ける手段には二つある。最初の方法が使われることは稀だが、次のようなものだ。魔術師は霊能者つまり「飛翔する霊」と呼ばれている女を使うんだ。この女は夢遊病者で、催眠状態に置かれると、霊となって望むところに飛んでいくことができる。そうすると、霊能者は何百里先にある、指定された人物に魔の毒を運んでいくことが可能になるのだ。このような方法で攻撃された者は、攻撃してくるものの姿が全く見えない。そして気が狂ったり、死んだとしても毒を盛られたなど夢にも思わないんだ。しかし、こうした霊能者は数がすくないことを別にしても、危険がないわけではない。誰か他の人間が、霊能者を催眠状態のまま硬直させて、自白を引き出すこともできるからね。だから、ドークルのような人間は、

二番目のもっと確実な方法を使うんだ。降霊術のように、死者の霊を呼び出し、予め用意した呪いを持たせて、相手のところに運ばせるのさ。結果は同じだが、運搬方法が異なるというわけだ」。²⁴

しかしながら、そもそもブーランの説によれば「流体」は「死者の霊」や「悪魔」を呼び出すための材料として用いられるのである。『彼方』の別の箇所には「飛翔する霊」や「死者の霊」(亡霊=larve)に毒のエキスを運ばせる呪いの手法は、薔薇十字団のメンバーのような悪魔主義の初心者も使う極めて普通の「流体的な操作」²⁵だと指摘されている。

男精夢魔や女精夢魔も流体的世界と密接な関係をもっている。ここでもブーランの手紙に直接由来する見解がジェヴァンジェーの口から述べられている。

現在誰も打ち勝つことのできない男精夢魔や女精夢魔の役割を果たすのは、悪魔ではなく死者の霊なんです。言いかえると、かつては、女精夢魔現象は、その犠牲になる人間にとっては「憑依」されるということでした。死者の呼び出しが悪魔的な側面に、^{ヴァン・ド・リス}死者との交合というおぞましい官能の側面が加えられることによって、言葉の厳密な意味ではもはや憑依ではなく、さらにひどいものになっているんです。こうなると、教会はもはやなすすべを知りませんでした。教会としては、沈黙を守るか、すでにモーセによって禁じられた、死者の呼び出しが可能なことを明らかにするしかありませんでした。しかしそれを認めるのは危険なことでした。というのも、以前より現在の方が、こうした現象を簡単につくりだせることを一般に知らせてしまうことになったからです。すこし前から、交霊術がそれと知らずに道筋をつけていたのです。

だから、教会は口をつぐみました。——しかしながら、教会は、今日、男精夢魔が修道院で猖獗をきわめていることを知らないわけではないのです。²⁶

ユイスマンスの小説に取り込まれたブーランの説によれば、女子修道院で多発しているヒステリーの発作は、男精夢魔の仕業であり、しかもそれ自体が、魔術師によって送り込まれる呪詛によって引き起こされているというのである。²⁷

これは、『彼方』に記述されている他の論者の観点からすれば、かなり特異な解釈だ。たとえばデル・リオ Antoine Martin Del Rio (1551-1608)²⁸ やボーダン Jean Bodin (1529-1596)²⁹ によれば「男精夢魔は人間の女性と交接する男性の悪魔であり、女精夢魔とは人間の男性と肉の交わりを結ぶ女性の悪魔」³⁰にすぎない。しかし、ジェヴァンジェーは、男精夢魔や女精夢魔の正体は、一般的な「呪詛」の場合同様、悪魔自身ではなく、悪魔に仕える魔術師によって呼び出された死者の霊だというのである。そして、この時、死者は、「地上では解体してしまった元の身体ではなく、流体によって作られた身体をまとして」³¹現れるのである。

V.

1870年代後半から『彼方』が書かれた1890年までの十数年間は、ルイ・パスツール Louis Pasteur (1822-1895)によって、微生物学が急速に発展させられた時期にあたっている。

普仏戦争後、パリを離れてフランス中部のクレルモン＝フェランに居を移したパスツールは、顕微鏡を使って、次々に動植物や人の病気の原因となる微生物を発見していた。1877年、悪性水腫菌。1880年、ブドウ球菌、連鎖球菌、鳥コレラ菌。1881年、肺炎球菌。そして、狂犬病のワクチンを発見した後、1888年にはパリにもどってパスツール研究所を設立する。

大氣中に目に見えない微生物がうごめき満ち、人間や動物の生命をも脅かす。当時、世上を騒がせた科学上の最新の知見も、ユイスマンスの『流体』に関するオブセッションを刺激したようだ。

空間は微生物であふれている。それなら空間が精霊や亡霊で満ちていても何の不思議があるだろうか。顕微鏡で見ると、水や酢の中には、小動物がうごめいている。人間の目や、器具では感知できない大氣中に、姿形もさだかでない魑魅魍魎やら、生育の程度もさまざまな胎児のようなものなど、微生物以外の要素がうごめいていることはないのだろうか。³²

『彼方』の主人公デュルタルは、15章であらためて空氣中に漂う得体のしれないものたちの問題を取り上げ、「流体」との関わりをさらにはっきりと述べている。

亡霊や飛翔する霊は遠くからやってきて、知らないうちに人間に害をなす微生物に比べて、結局、それほど異常というわけではない。大氣は、バクテリアとまったく同じように霊も運ぶことができるのだ。大氣は、霊気や瘴気、電気、あるいは催眠術師のあやつる流体を、性質を変えることなく運搬するのだ。催眠術師はこの流体の働きによって、離れたところにいる人間に、パリの街を突っ切って、自分のところまでやってくるように命令を送ることができるのだ。³³

ここまでくると、流体に関するユイスマンスの想像力はいささか悪夢の様相を帯びてくる。あたかも、宇宙の空間という空間がすべて流体を伝達・運搬する媒質であるかのように考えられている。もしかすると、空間そのものが、流体で満たされているということなのかもしれない。そして、その空間の中を、無数の目に見えない微生物や、穢れや毒をはらんだ流体が自由に移動するのだ。

ユイスマンスがオディロン・ルドン Odilon Redon (1840-1916) の絵画の中に見いだしたのも、まさにこのような流体からなる「怪物」だ。ユイスマンスはギュスターヴ・モロー Gustave Moreau (1826-1898) とならんでまだ一般には無名だったルドンを『さかしま』*À Rebours* (1884) の中で絶賛したほか、独立した美術評論「怪物」(『画家評論(ある画人達)』*Certains* (1889) 所収) の中でも論じている。

後に画家は、ユイスマンスの評論が自分の意図を全く読み損なっていると批判している。ユイスマンスはルドンの中に描かれた形象を見て、顕微鏡で拡大した微生物を連想し、画家の意図などかまうものかは、自分の流体に対する恐怖や嫌悪をぶちまけているのだ。

ルドンは波立ち流れる世界、投射によって拡大された不可視の領域から想を得て彼の怪物をつくりだそうとしたのだ。いにしえの名匠は、しばしば黙示録の怪獣を誇張して描いているが、それら目に見えぬほど微小な怪物たちは、黙示録の怪獣が群がりひしめく世にも恐ろしい光景よりも、さらにいっそう激しい恐怖を掻き立てるのである。(…) いつまでも続く暗黒の空に、液状で燐光を放つ存在、水泡や棒のような形をしたもの、周囲をぐるりと細かい毛に囲まれた粒状のもの、繊毛の密生した嚢状のもの、水を吸ってふくれたり、柔毛で覆われた球状のものが浮き上がり、鞭毛虫や真田虫に似た帯のなかを、羽もないのに飛び回り、互いに絡みあっているのだ。この版画の真っ暗な夜に蠢くあらゆる種類の線虫や寄生虫のなかに、不完全な人間の顔のようなものが突然現れ、ゆらゆらと生きた巻きひげの先にぶら下がったり、ぶよぶよと蠢くゼラチン状の原形質のなかに細胞の核のように沈みこむ。³⁴

ユイスマンスの文章の中には先ほど例にあげた金銭＝資本に対する嫌悪を始め、アメリカニズム、

ユダヤ人、フリーメーソンなど、社会的・文化的な「脅威」に対する恐怖や、場合によっては差別感情が表明されるが、その背後には、「流体」の形で、あるいは「流体」状の大気を通じて、自分のやすらう「閉鎖空間」に侵入してくる微小で、目に見えない怪物——微生物、精霊、亡霊等々——に対する恐怖が隠されている。

VI.

ブーランの教説や『彼方』のテキストに現れる「流体」は、先にあげたような「科学的」な定義に還元されるものでない。19世紀の科学は「流体」から超自然的な要素を注意深く排除しようとした。しかし、にもかかわらず「流体」には、単に物質のある「様態」を指す以上に、この時代の科学や医学が、いやそればかりか、オカルト神秘主義や文学までもが、こぞって強い興味を示したもう一つの側面がある。というよりもう一つの「流体」があるのである。

それは最初「動物磁気」という名前で呼ばれ、後に「催眠術」「催眠療法」という名で呼ばれた奇妙な社会現象の中で中心的な役割を示す奇妙な「物質」のことである。

「動物磁気」はウィーン出身の医師フランツ＝アントン・メスマー（フランス風に発音すれば、メスメル）Franz-Anton Mesmer (1736-1816) が行った奇妙な治療が始まりだ。³⁵

メスマーはウィーン大学で医学博士の学位を取った後「普遍流体」の理論に触発され、1778年以降、パリに移り住んで「流体」の原理を利用した治療を始めた。

「流体」とは人間の身体から出てくる磁石や電気に似た性質をもった目に見えない「物質」である。「普遍流体」それ自体は、16世紀の後半、ミクロコスモスとマクロコスモスとの照応というルネサンス的な世界観にたって生まれた理論である。宇宙の中にも、地上の生物や物質の中にも「普遍流体」と呼ばれる物質が存在する。そして恒星界をめぐる流体の動きが、地上の生物や物質の流体に影響を及ぼしている。従って、流体の原理によって自然界におこるすべての現象が統一的に説明できるというのだ。この理論の有力な支持者には、パラケルスス Paracelsus, fr.: Paracelse (1493-1541)³⁶ や、ヴァン・ヘルモン Jan Baptist van Helmont (1577-1644) などの著名な学者も含まれている。

この理論はウィリアム・ギルバート William Gilbert (1544-1603)³⁷ の『磁力について（磁石及び磁性体ならびに大磁石としての地球の生理）』*De Magnete, Magneticisque Corporibus, et de Magno Magnete Tellure* (1600) 以降「磁力」の性質に関する研究が進み、磁力が遠く離れた場所にも影響を及ぼすことが一般に知られるようになると、「事実」の裏付けをうけて一層流行し、これを病気の治療に応用しようとするものも現れた。

メスマーはさまざまな病の原因は、人間の身体の中の流体の分布に不均衡が生じたためだと考え、最初は磁気を使った治療を試みた。しかしやがて、本来の磁気以外の手段でも磁気以上の効果が生み出せることを「発見」する。患者の身体に軽く手を触れるなど外部からの操作や、さらには単に治療者の意思によって「流体」をコントロールし、生きた患者の身体を流れる流体に影響を与えることができることを主張したのである。こういう手段で、流体の均衡を失った身体の中に、様々な方向の流れをつくりだすと患者は、痙攣性の発作を起こすが、これによって患者の身体のなかの流体は自然な流れを回復し病気が治るというのだ。

そして、メスマーは、鉄など鉱物から発生する鉱物磁気に対して、生体から発生する磁気という意味で「動物磁気」という言葉を使いだした。

しかしながら動物磁気という現象の広がりはそれだけにとどまらなかった。まだ「心理療法」という言葉が作られる以前の心理療法である動物磁気は、後に、催眠療法や精神分析、超心理学に分化・発展する要素や、さらには純粋なオカルティスムまでもを包含する広大な領域をカバーしていた。

ある意味で、真の「動物磁気」の歴史は、メスマー自身ではなくメスマーの晩年の友人で、メスマーの影響で動物磁気の治療を始めたピュイセギュール侯爵 Armand-Marie-Jacques de Chastenet, Marquis de Puységur (1751-1825) が「催眠状態」(誘導催眠状態あるいは夢遊症)を発見した時にはじまるといっても過言ではない。ある時、ピュイセギュール侯爵はヴィクトール・ラス Victor Race という名の若い農夫に動物磁気の施療を試みた。メスマーの理論によれば身体の流体の流れを操作すると、痙攣性の発作が現れるはずである。ところが、この若者は静かで深い睡眠状態におちいった上、その状態で施術者であるピュイセギュールと言葉によるコミュニケーションを交わすことができた。

しかも注目すべきことに、この若者は催眠状態におかれると、教えられていないのに、知識人が話すような美しいフランス語で、普段考えてもいないような高尚な話題について語り、前もって自分の病の経過を予言し、相手の心を読み取るなど、信じられないような能力を発揮し始めた。

しかし、こうした異常な能力を示したのは、ピュイセギュールの患者だけではなかったのだ。『彼方』出版に先立つ6年前の1886年に書かれたある書物のなかで、磁気催眠にかけられた「夢遊症者」や「霊媒」にしばしば異常な能力が認められることが報告されている。「霊媒」という言葉が用いられているのは、この時代、動物磁気は「交霊術」spiritisme などのオカルト現象と同じ枠組みで考えられようになっていたからだ。

催眠状態に入った患者のなかには、過去や未来を知ったり、他人の考えを読み取ったり、不透明な物体の向こう側や、ずっと離れたところにあるものを透視したり、首筋や胃で字を読んだり、病気の種類やそれに対する適切な治療法を言い当てたりするなどの能力を示す者がいた。³⁸

同じ書物に「プレヴォーの^{グロワイヤント}霊視者」という名前と呼ばれる有名な女性の話がでている。

今世紀(19世紀)始めに生きていたある女性は催眠状態に入って、別の人の右目をのぞき込むと、普段より重々しかったり軽薄だったりするその人のありのままの姿が浮かび上がった。彼女はシャボン玉を見ると、その場にいない人や、これから起ころうとしている出来事が見えた。文字を書いた紙を胃のあたりに置くと、その文字が読め、自分や他の人の体内の器官を見ることができ、予知夢を見て、未来の事件や近親者の死を予言した。また、彼女は病気の人を見分けて、症状にあわせて何を飲めば直るかを教え、手を腹にあてて寄生虫を追いかえ、月桂樹の葉のお守りで、心の病気を治した。自分がどこか苦しいことがあると、馬の疣をすりつぶした粉薬を処方して、それで病気を治した。磁気を帯びた手を患部に7回当てると、胸の苦痛が消えた。21回当てると、頭痛が治った。49回当てると、身体他の部位の苦痛が癒された。他の病を治すにはカバラの呪文をお守りに書きつけるだけで十分だった。そして最後に、不思議のなかの不思議のだが、彼女には人間の魂がはっきりと見え、形や色を言い表すことができた。³⁹

VII.

『彼方』やブーランの手紙に出てくる謎めいた記述は19世紀に流行した動物磁気や、催眠現象、交霊術などの光に照らしてみる時、初めて、納得のいく理解が得られる。交霊術というのは、動物磁気

や催眠現象のオカルト・バージョンだと思えばわかりやすい。しかし、それだけではまだブーランの「流体」のもつ射程を正確に測るには不十分だ。

我々は、次稿において、ブーランの流体を歴史の中に置き直し、動物磁気や催眠幻視術などとの関連を探ると共に、これがキリスト教文化に深く浸透された西欧文化の思想圏の中でどのような意味をもつのかを探らねばならない。

註

- 1 この論考は筆者が現在執筆中のユイスマンスに関する研究書『ユイスマンスとオカルティズム（仮題）』（新評論社より近刊予定）を構成する1章として構想されたものをもとに、加筆・修正したものである。この論考の主題である「ブーラン元神父」に関しては、筆者は、過去の論文の中でもたびたび言及し、特に、その中心概念である「流体」に関しては、これをユイスマンスの作品総体との関連で圧縮的に記述した以下の仏語論文と部分的に記述に重なりがある。ただ、ユイスマンスとマリア派異端の問題を語る場合、この主題を避けて通る訳にはいかない。諒とせられたい。Cf. «La réparation et la magie-quelques réflexions sur l'univers fluide de J.-K. Huysmans», *Études de Langue et Littérature Françaises*, n° 80, 2002, pp. 89-102.
- 2 Cf. Pierre Lambert, «En marge de *Là-Bas*: une cérémonie au «Carmel de Jean-Baptiste» à Lyon, d'après J. A. Boullan», in *Bulletin de la Société J.-K. Huysmans*, n° 25, 1953, pp. 287-306.; - «Un culte hérétique à Paris», in *Cahiers de la Tour de Saint-Jacques*, n° 8, 1963, pp. 190-201.; Pierre Congy, *J.-K. Huysmans à la recherche de l'unité*, A. G. Nizet, 1953.; - *J.-K. Huysmans, de l'écriture à l'Écriture*, Téqui, 1987.; - «Le mysticisme de J. K. Huysmans et Sainte Lydwine de Schidam», in *Mélange des Sciences Religieuses*, septembre 1952, pp. 243-250.; Maurice M. Belval, *Des ténèbres à la lumière, Étapes de la pensée mystique de Huysmans*, G. P. Maisonneuve et Larose, 1968.; Richard Griffiths, *Révolution à rebours. Le renouveau catholique dans la littérature en France de 1870 à 1914*, Desclée de Brouwer, 1971.; - «Huysmans et le mystère du péché», in *Bulletin*, n° 92, 1999, pp. 5-14.; Robert Baldick, *La vie de J.-K. Huysmans*, Denoël, 1958.
- 3 A. Vergotte, *Dette et désir*, Seuil, 1978.
- 4 1886年11月24日付書簡（cité par Stanislas de Guaita, dans *Temple du Satan*, pp. 468-469.）
- 5 紀元前600年頃に活動したイスラエルの預言者。イスラエルの14人の小預言者の一人。
- 6 André Billy, *J.-K. Huysmans et ses amis lyonnais*, H. Lardanchet, 1942, pp. 50-51.
- 7 「ユイスマンスとブーラン—発端—マリア派異端とユイスマンス（その1）—」, 『学苑』平成19年5月号, 昭和女子大学, p. 5.
- 8 Jules Bois, *Les Petites Religions de Paris*, Léon Chailley, 1893, pp. 128-130.
- 9 Marcel Boll, *L'Occultisme devant la science*, PUF, 1950, p. 60.
- 10 Cf. 拙論「J.-K. ユイスマンス『さかしま』における“閉鎖”と“浸透”」, 季刊『現代文学』, 44, 1991年, pp. 1-19.
- 11 拙論, 「『マルト』—“回収”とその逆説」, 『ヨーロッパ文学研究』, 第40号, 早稲田大学文学部, 1993年, pp. 66-77.
- 12 Marthe, in J.-K. Huysmans, *Œuvres Complètes*, Stock, 1928-1934 (Slatkine Reprint, 1972), (以下 *Œ. C.* と略), t. II, p. 33.
- 13 *La Bièvre*, in *Œ. C.*, t. XI, p. 9.
- 14 *La Bièvre*, in *Œ. C.*, t. XI, p. 23.
- 15 *Croquis Parisiens*, in *Œ. C.*, t. XIII, p. 87.
- 16 *Marthe*, in *Œ. C.*, t. II, pp. 75-76.

- 17 *Marthe*, in *Œ. C.*, t. II, p. 80.
- 18 *Là-Bas*, Gallimard, «Folio», 1984, p. 37.
- 19 *Là-Bas*, p. 39.
- 20 *Là-Bas*, pp. 39–40.
- 21 *Lettres de l'abbé Boullan*, Bibliothèque de l'Arsenal, Fonds Lambert, MS 76, 1890–1892, folios 185, 187, 193, 197, 201, 203, 205, 229.
- 22 *Là-Bas*, p. 232.
- 23 *Là-Bas*, p. 232.
- 24 *Là-Bas*, pp. 233–234.
- 25 *Là-Bas*, p. 311. 「彼ら（＝薔薇十字団）は、何年か前パリにやってきた3人のブラーフマン僧が彼らに明かした流体と毒を用いる手法を、機械的に繰り返しているだけなのです」。
- 26 *Là-Bas*, pp. 171–172.
- 27 *Là-Bas*, p. 172.
- 28 スペイン生まれの神学者。魔術研究家。主著に、『魔術探求』*Disquisitionum magicarum libri sex* (1599)がある。
- 29 絶対王政の理論家、自由貿易主義を唱えた経済学者として有名。魔術の分野では『妖術使い達の悪魔憑き』*Démonomanie des sorciers* (1579)がある。
- 30 *Là-Bas*, p. 170.
- 31 *Lettres de l'abbé Boullan*, folio 87.
- 32 *Là-Bas*, p. 167.
- 33 *Là-Bas*, p. 237.
- 34 «Le monstre», dans *Certains*, *Œ. C.*, t. X., p. 123.
- 35 メスマーに関するものとしては、Robert Darnton, *Mesmerism and the End of the Enlightenment in France*, Harvard University Press, Cambridge, 1968. (邦訳、ロバート・ダーントン著、稲生永訳、『パリのメスマー』、平凡社、1987年)、ジャン・チュイリエ著（高橋純、高橋百代訳）『眠りの魔術師メスマー』、工作舎、1992年、などを参照。
また、催眠現象全体については以下の書物を参照。
Léon Chertok, Raymond de Saussure, *Naissance de la psychanalyse*, Synthélabo Group (Réédition de l'édition Payot), 1970, 1996; Léon Chertok, Mikkel Borsch-Jacobsen & coll., *Hypnose et psychanalyse*, Dunod, 1989; Léon Chertok, Isabelle Stengers, *L'hypnose, blessure narcissique*, Laboratoire Delagrangé, Coll. «Les empêcheurs de panser en rond», 1990; Bertrand Méheust, *Somnambulisme et médiumté*, t. 1: Le défi du magnétisme, t. 2: Le choc des sciences psychiques, Institut Synthélabo, Coll. «Les empêcheurs de penser en rond», 1999. 特に最後のものはソルボンヌ大学に提出された社会学の博士論文だが、18世紀から20世紀にいたる「催眠現象」問題を総括する大著であり、多くの情報を得た。
- 36 本名、テオフラスト・ボンバスト・フォン・ホーヘンハイム Theophrast Bombast von Hohenheim。スイス生まれの医師。医学・哲学・宗教の面で多大な影響を残した。
- 37 イギリスの医師・物理学者。エリザベス女王の侍医を務めるかたわら、磁石および磁力を研究した。
- 38 Alexandre Cullaie, *Magnétisme et Hypnotisme*, Paris, J.-B. Baillière et Fils, 1886, pp. 2–3.
- 39 *Ibid.*, p. 3. 著者自身の出典は Du Poté, *Traité complet du magnétisme animal*, Paris, 1883である。プレヴォーの霊能者については以下も参照。Justinus Kermer, *Die Seherin von Prevost. Über das innere Leben des Menschen*, Stuttgart, 1828. *La Voyante de Prevost*, Paris, Chamuel, 1900, pp. 33–44.

(おおの ひでし 総合教育センター)